

総合科学研究所だより

Research Institute of Integrated Sciences and Humanities

巻頭言

総合科学研究所主任 山中 なつみ
YAMANAKA Natsumi

平成17年に制定された「食育基本法」の前文冒頭では、次のように述べられています。「二十一世紀における我が国の発展のためには、子どもたちが健全な心と身体を培い、未来や国際社会に向かって羽ばたくことができるようにするとともに、すべての国民が心身の健康を確保し、生涯にわたって生き生きと暮らすことができるようにすることが大切である。」

「食育基本法」は、食生活が果たすべき栄養的、精神的、社会的、文化的機能が不十分となり、心身の健康に関わる様々な問題が生じてきたことを主な背景として制定されました。食育を知育、徳育、体育の基礎と位置づけ、基本理念として「健全な食生活を実現するために必要な知識を身につけ、適切な判断力を養う」、「食を支える自然の恩恵や人々の活動に対する感謝と理解を深める」、「農山漁村の活性化と食料自給率の向上」等を挙げています。また、国、地方

公共団体、教育関係者及び農林漁業者、食品関連事業者、国民の責務が各々定められ、あらゆる立場の者が食育に取り組むこと、各々の立場の者が協力して活動することの必要性も示されています。

教育関係者の責務は「あらゆる機会とあらゆる場所を利用して、積極的に食育を推進するよう努めるとともに、他の者の行う食育の推進に関する活動に協力するよう努めるものとする。」とされています。食に関わるあらゆる教育はこの責務に応えるものですが、特に様々な団体と連携した地域貢献事業は教育機関の重要な役割として、さらに充実していく必要性を感じます。

食生活は個人の意思に基づく習慣であり、好きな物を食べたいという欲求に強く影響されます。知識を得ればすぐに改善されるというものではないため、短期的な成果が見えにくいことが食育推進活動の特徴と言えます。しかし短期的な成果を追求せずに長期的な活動が可能であることは、企業や自治体にはない教育機関の強みであると思われます。地域の特徴をふまえた現状分析や問題提起、最新情報の発信、地道な教育活動の継続、さらに新しい体験活動やICTの活用といった取り組みが、これからも教育機関に求められる食育推進活動であると考えます。

令和3年度 総合科学研究所「開かれた地域貢献事業」報告

本研究が推進する「開かれた地域貢献事業」は年々発展を続け、今年で15年目となりました。地域の公共施設である名古屋市の瑞穂児童館、瑞穂保健センターとの交流事業に加えて、瑞穂区役所との連携事業も順調に発展し、今年もさまざまな事業の実施が期待されていました。しかし、昨年度に続く一連のコロナ禍の影響は大きく、参加者や関係者の安全を最優先に考えた結果、一部の事業を中止しました。感染防止対策を講じ安全性に配慮して、従来の方法とは異なる様式、規模での開催となりました。

瑞穂児童館との交流事業は、保育・教育、栄養・生活、情報関係で9講座と、児童館クリスマスイベントで4つの企画を行いました。クリスマスイベントは今回も参加を予約制とし、朝から夕方にかけて各企画が順に開催されました。瑞穂保健センターとの交流事

業では、協議の結果、安全性の確保が困難とし、本年度も実施を見送りました。瑞穂区役所との連携事業では一昨年度に実施した、働く女性の支援を目的とした育休復帰予定の方々への「育休復帰応援講座 調理のコツをマスターすれば簡単おいしい時短料理」をオンラインで開催できました。

これらはいずれも、健康科学部健康栄養学科、文学部児童教育学科、短期大学部生活学科・保育学科の教員と学生の有志、春光会、および総合科学研究所の教職員による協力があった実施できました。今後とも、地域の方々と触れ合う機会を大切にしながら、新しい生活様式と安全性を考慮し、取り組んでまいります。

(文責：森屋裕治)



親子で楽しむ音楽遊び



楽しいクッキー作り



クリスマスのペーパークラフト作り



ヒノキを使った木琴作り

機関研究

「創立者越原春子および女子教育に関する研究」

～戦後昭和期の発展と拡大～

本研究は令和元年度～3年度の3年を期間としており、本年度は、その最終年度に当たります。前期研究を引き継ぎながら、「戦後昭和期の発展と拡大」を今期のテーマとして研究を進めてきました。

共同研究においては前期に引き続き、『学園七〇年史春嵐』（1985年）以降の学園の沿革をたどる作業として、本学関係者へのインタビューを行ってきました。コロナウイルス感染拡大の状況等により計画通りに進められないこともありましたが、より精緻な本学の歴

史叙述へと貢献しました。また昨年度に引き続き、女子教育に関わる最新の研究文献を輪読し、検討を行いました。

個人研究に関しては、各メンバーが自らの専門性に基づいた研究を進めています。本学が四大を開設し発展・拡大していく戦後昭和期における女子教育の位置付けについて、教育学、歴史学、音楽学、社会学等の多様な観点を総合し、『総合科学研究所』最終報告へ向けて学際的な研究を継続して遂行しています。

(文責：佐々木基裕)

機関研究

「大学における効果的な授業法の研究9」

～本学教育に適した効果的なインストラクショナルデザインに関する研究～

本研究は、今年度から3年間「大学における効果的な授業法の研究9」として、本学の教育に適した効果的なインストラクショナルデザインに関する研究を行います。「大学における効果的な授業法の研究8」で行った学生における効果的なアクティブラーニング(AL)の開発も継承しつつ、「教育活動の効果・効率・魅力を高めるための手法を集大成したモデルや研究分野、またはそれらを用いて学修支援環境を実現するプロセスのこと」を示すイ

竹内正裕代・市村由貴・河合玲子・佐々木基裕・杉原央樹・羽澄直子・服部幹雄・三宅元子・吉川直志

ンストラクショナルデザインの開発を目指します。本年度は、特に教育におけるICT化に焦点をあて、各研究員が大学で担当する授業を紹介し合い意見交換をしました。研究会もIWB(Interactive Whiteboard)とWi-Fiが設置されている西館ラーニングコモンズで行いました。次年度も、引き続き効果的なインストラクショナルデザインの授業設計ができることを目指し実践報告やテキストを用いて研修を深めていきます。

(文責：竹内正裕)

機関研究

「幼児教育で育みたい資質・能力に関する研究」

附属幼稚園の教育は、より本質的にするために歩み出した取り組みも2年目を迎え、子どもの主体性を重視して保育内容を見直してきています。行事のプロジェクト化もその一つです。運動会では、その内容を子ども自身が中心になって考え、工夫を凝らしながら当日まで進めてきました。5歳児は、音楽に合わせて表現するリズム遊びを、子ども自身が考えた振り付けで発表することができました。3歳児は、リズム遊びで頭につける飾りを、一人一人が材料から選択し、楽しいデザインの帽子を作り上げました。また、4歳児は、シフォンの布で柔らかい表現を工夫し、色とりどりの花を咲かせて踊りました。今回の取り組みは、運動会のテーマ「つなぐ」に対して、子ども自ら考え取り組み発表できたものになった

幼児保育研究会

ように思われます。子ども達は、主体的な取り組みを通して大きな自信を獲得し、その姿に、個々の確かな成長を確信できるようになってきています。

(文責：森岡とき子)



運動会「ななりんびっく」



きれいなシフォンの布で踊ったよ

機関研究

「食と健康に関する研究」

本研究では、食物の入り口である口腔に重点を置いた「咀嚼」に関する研究をはじめ、食と健康の関わりについて研究を進めております。本研究会から発刊された『「かむ」ってなあ～んだ』という冊子を用いて教育への活用を解析し、『総合科学研究所』第15号「食と健康の意識向上のための遠隔啓発効果～小学生向け食育媒体の開発とその啓発効果～」にまとめました。また、卒業生へ配布し学修と媒体活用のアンケート調査と集計・解析を行い、紀要論文「咀嚼に着目した小学生向け食育教材の評価」に報告しました。さらに、名古屋女子大学付属幼稚園における保護者講演会が開催され、6月

近藤浩代代・駒田格知・大曾基宣・小椋郁夫・近藤志保・高橋哲也・幼児保育研究会

に「子どもの食育について一偏食・共食を中心に(大曾)」を、12月に「身近な菌と食の安全について(近藤浩)」について講演を行い、今後も附属幼稚園と連携して食育の推進と食と健康を啓発してまいります。本年度は食育に関する教材の調査も行っており、より必要とされる食育教材の開発や、指導者用教材等を開発してまいります。

これらの活動を通して健康長寿社会における食の大切さについて、幼児から各世代に食と健康からアプローチし、啓発と研究を進めてまいります。

(文責：近藤浩代)

プロジェクト研究

「学生の保育パフォーマンスを高めるための評価方法を導入した保育実習指導について」

平澤節子(代)・山本麻美

本研究は、実習指導における保育実践時に、ルーブリック指標を用いたPA（パフォーマンス・アセスメント）シートを活用し、自己または他者からの評価を通して、保育パフォーマンスを高めるための実習指導について考えていくものです。

今年度は、保育実践時に必要な個人の発表技法（パフォーマンス）の評価指標（ルーブリック）を作成し、領域「表現」の観点から、指導計画の留意点や年齢に合った説明方法などをまとめた教材

『領域「表現」音楽と造形からのアプローチ 表現力を磨くためのアセスメント～保育パフォーマンスを高めるための評価～』を完成しました。実習指導では、保育実践として「手あそび」と「自己紹介」の模擬保育を実施し、当テキストとPAシートを用いた評価を行いました。今後は、収集したデータをもとに、ルーブリック指標の観点項目を見直ししながら、PAの効果について分析して参ります。

(文責：平澤節子)

令和4年度プロジェクト研究

「学生による食育実践活動が対象者と学生にもたらす教育効果の検証」

山中なつみ(代)・佐喜真未帆・伊藤美穂子

愛知県では2021年度から5年間の第4次食育推進計画「あいち食育いきいきプラン2025」が推進されており、「高齢期における食による健康維持の推進」、「地域における健康寿命延伸につながる食育の実施」への取組みが求められています。これまでに多くの食育活動が食および栄養の専門家により実施されてきましたが、知識、スキルの獲得や健康に関する意識の改善はなされても、実践的な食行動の変容には至っていないことが問題とされています。

本研究では、健康栄養学科の学生に食育を実践する場を提供し、対象者の身体・生活状況や心に寄り添った食育活動がこの問題を解決できるか否かを検討します。対象者が身近に感じる学生が対象者ニーズを拾い上げ、共同して食育講座を実施することによる対象者の行動変容への効果を検証、さらに学生が授業で修得した知識とスキルを統合し、学外での食育活動の計画、実践、評価をすることによる教育効果を検証します。

(文責：山中なつみ)

● 総合科学研究所主催 ●

令和3年度大学講演会（令和4年2月8日）

「教育のためのICTの活用について」

講師：中川一史氏 [放送大学 教養学部教授]

佐藤幸江氏 [放送大学 客員教授]

松下幸司氏 [香川大学 教育学部准教授]



中川一史氏

今年度の大学講演会は、コロナ禍において加速する教育現場でのICT活用をテーマとし、メディア教育をご専門とする中川先生にご講演いただきました。文部科学省が推進するGIGAスクール構想を背景として、現在小中学校で実施されているデジタル教科書を活用した授業例などを、多くの動画をういてご紹介くださいました。「個別最適な学び」、「協働的な学び」に向けて改革が進む初等教育の現状を知ることができました。さらに中川先生のご紹介で佐藤先生、松下先生にもご講演いただきました。大学の授業や学務システムにおけるICTの活用例や課題、情報インフラ導入の現状等につ

いても理解を深めることができ、大変充実した内容の講演会となりました。

新型コロナウイルス第6波感染急拡大の状況をふまえ、今年度は教職員の方には各自のパソコンからご参加いただく形式で開催しました。ご講演後の質疑応答はZoomのチャット機能を、参加者アンケートはGoogleフォームを用いて完全オンラインでの実施となりました。

(文責：山中なつみ)

総合科学研究所「開かれた地域貢献事業」に参加して

瑞穂児童館との交流事業「身の回りの菌とキレイを見てみよう！」

子どもたちに、身近にいる菌を知り、手洗いの重要性を体験しながら理解してもらえよう、4年間の実習や講義で培ったことを活かして当日のサポート方法を工夫しました。

当日は、子どもたちが今までの手洗いの仕方について考え理解したり、実際に菌を顕微鏡で夢中になって観察したりする姿に感動しました。

人々の安全を守るために知識を身につけることも大切ですが、身につけた知識を子どもたちへ還元していくことも私たちの重要な役目であると、この体験を通じて強く感じました。

(健康科学部健康栄養学科4年)



自分の手についている菌の数を調べる実験

瑞穂児童館との交流事業「タブレットでかんたんプログラミング」

小学生の子どもたちはどの子も「やってみたい」という意欲が高く、好奇心旺盛で、挑戦している姿がとても良いと感じました。お化けの絵をゆらゆら動かすためにはどうすれば良いかを考える時に、「これはこうじゃない？」と自分自身で試行錯誤して答えを見つけ出している子どもが多く、「やってみたい」という気持ちから「できた」という結果に繋がるこの過程が、子どもたちにとってとても大切なことなのだと感じました。これまで小学生の子どもたちと関わる機会があまりなかったため、とても良い経験になりました。

(短期大学部保育学科第三部2年)



タブレットを使ってプログラミングに挑戦

今年度(令和3年度)運営委員

委員長

森屋 裕治
MORIYA Yuji
(短期大学部)

河合 玲子
KAWAI Reiko
(短期大学部)

羽澄 直子
HAZUMI Naoko
(文学部)

福田 峰子
FUKUTA Mineko
(健康科学部)

三宅 元子
MIYAKE Motoko
(家政学部)

研究所メンバー

所長

渋谷 寿
SHIBUYA Hisashi

顧問

河村 瑞江
KAWAMURA Mizue

主任

山中 なつみ
YAMANAKA Natsumi

教授

越原 一郎
KOSHIHARA Ichiro

教授

竹田 徳則
TAKEDA Tokunori

職員

牧野 弘実
MAKINO Hiromi

編集後記

総合科学研究所だより34号をお届けします。本号では令和3年度の地域貢献事業、機関研究ならびにプロジェクト研究の内容等について掲載されています。ご執筆いただきました関係者の皆様に感謝申し上げます。新型コロナウイルスによってさまざまな活動が制約されるようになって2年。人に直接伝えることの大切さを実感する一方で、ICTの活用で遠隔でも効果的な情報伝達が可能であることも分かりました。大学講演会では令和2年度に引き続きオンライン教育をテーマにご講演いただきました。コロナ禍での経験や知識を活かして総合科学研究所の活動がさらに進んでいきますよう、今後とも皆様のご協力をお願いいたします。

(文責：山中なつみ)